『菅家文草』『菅家後集』を中心に見た上代・中古前期の漢語畳語の受容

――併せて川口久雄氏校注旧大系本の「適ニ遇」を「適遇」に訂す――

中山大輔

論文要旨

本論は、上代と中古前期の本邦漢詩漢文作品における畳語例を調査することで、中国から本邦への漢語畳語受容の様相を明らかにするものである。その中でも、特に多くの漢詩漢文作品の残る菅原道真について、代表的作品集である『菅家文草』『菅家後集』から畳語用例を全て抽出し（異なり語数一一七語、延べ語数二六三例）、その特徴について考察を試みた。

調査結果としては、㈠『懐風藻』から『経国集』にかけての本邦漢詩漢文作品では、時代が降るほど畳語の用例が増加する事、㈡『菅家文草』『菅家後集』の畳語一一七語の内、半数以上の六〇語が本邦での初出例（『日本国語大辞典（第二版）』による）になっている事、㈢『菅家文草』『菅家後集』の畳語には、唐代までの散文を含めた中国文献に用例の無い、独自の語彙は確認できなかった事、などが明らかとなった。以上の結果により、本邦で畳語が駆使されるまでにはある程度の時間がかかっていた事、菅原道真が多数の畳語を中国から正確に摂取し、先駆的に用いていた事、などを結論として示す。また『菅家文草』畳語例の調査の中で、川口久雄氏校注旧大系本にて「適ニ遇」と作られている箇所について、正しくは「適遇」であった事を確認した。

キーワード【畳語、菅原道真、菅家文草、菅家後集、漢語受容】

一、はじめに

本論は、菅原道真が『菅家文草』『菅家後集』で使用した漢語の中から、畳語の全用例（異なり語数一一七語、延べ語数二六三例）を取り上げ、上代・中古前期の本邦主要漢文作品および中国宋代までの資料における畳語と比較し、その日本語史における漢語受容の一事例として考察を加えようとするものである。筆者は菅原道真の唐詩詩語受容の正確さについて、既に安部・中山（二〇一二）にて詩語「敧枕」を取り上げて考察し、また唐宋期の中国における「敧枕」の用法変遷について中山（二〇一四甲乙、二〇一五）にて調査を行い、中国詩詩語と本邦漢語受容の関連を検討してきた。本論は

その方法を畳語に敷衍したものである。考察の全体は長文になるため、全体を三分し、一つ目には上代・中古前期の本邦畳語使用の概観と、『菅家文草』『菅家後集』の畳語を抽出した事で見える特徴（本稿）、二つ目には道真の畳語から見える仏教語および唐代口語の受容の考察（中山（二〇二二））、三つ目には道真作品内での畳語の実際例の考察と以上三本を通してのまとめについて論じた。

なお、全体の結論として以下の三点を示す。

○上代・中古前期の本邦漢詩文において、『懐風藻』から『経国集』にかけて、時代が降るほど畳語の使用例が増加する傾向がある。

○『菅家文草』『菅家後集』の畳語一一七語の内、半数以上の六〇語が本邦での初出例（『日本国語大辞典（第二版）』による）になっている。

○『菅家文草』『菅家後集』の畳語には、唐代以前の散文を含めた中国文献に用例の無い、独自の語彙は確認できなかった。

更に本稿では、以下の点を特に加えることができる。

○『菅家文草』『菅家後集』において、作品種類別では特に「賦」に畳語が多く用いられていた。

○『菅家文草』巻一「晩冬過文郎中、翫庭前早梅。」の詩序中、川口久雄校注『日本古典文学大系72菅家文草　菅家後集』にて「適ニ遇」と翻刻されている箇所について、本来は踊り字「ニ」の無い、「適遇」であったと考えられる。

二、本稿で扱う「畳語」の定義

まず、本稿で扱う「畳語」について定義しておきたい。一般的な〝畳語〟としては、例えば『日本国語大辞典（第二版）』では以下の様に定義されている。

じょう-ご【畳語】〔名〕同一の単語を重ねて一語とした複合語。体言、動詞の連用形および終止形、形容詞の語幹・連用形・終止形、副詞、感動詞、語根、連語などが重複する。語の意味を強めたり、事物の複数、動作・状態の反復・継続などを示したりする。（傍線筆者）

「動詞の連用形（中略）などが重複」とある様に、一般的な〝畳語〟には「ゆくゆく」「オイオイ」等の和語の繰り返し言葉も含まれるのだが、本稿で扱う「畳語」は漢語に限定して、「洋洋」「悶悶」など同じ漢字を反復して成る語、としたい。『菅家文草』『菅家後集』は漢詩文集であるため本文中に和語の〝畳語〟は含まないが、例えば「適」一字で「たまたま」、「夜」一字で「よなよな」と訓読するような、訓読語のみが〝畳語〟になるものについては本稿では「畳語」として扱わなかった。あくまでも漢語の「畳語」に限定して調査を行った。本稿では以下特記なく畳語と表す場合、以上の様

な漢語の「畳語」を指す。なお、畳語には他に、「畳字」「重言」「重字」等の呼称もある。

三、畳語調査の目的　―畳語の特質を利用して

迢迢牽牛星　迢迢たる牽牛星
皎皎河漢女　皎皎たる河漢の女
纖纖擢素手　纖纖として素手を擢んで
札札弄機杼　札札として機杼を弄す
終日不成章　終日章を成さず
泣涕零如雨　泣涕零ちて雨の如し
河漢清且浅　河漢清くして且つ浅し
相去復幾許　相去る復た幾許ぞ
盈盈一水間　盈盈たる一水の間
脈脈不得語　脈脈として語るを得ず

（『文選』巻二十九雑詩上「古詩十九首」第十首（全文）詩文・訓読文は『新釈漢文大系15文選（詩篇）下』より、傍線筆者）

右の「古詩十九首」の一首は、本邦においても今なお親しまれている牽牛と織女の物語、所謂七夕の伝説を詠んだごく初期の詩とされている。この詩に触れてまず感じるのは、「迢迢」「皎皎」「纖纖」「札札」「盈盈」「脈脈」と六語もの畳語が五聯の内に詠み込まれている点であろう。特に畳語の目立つ詩を選んだのではあるが、最古の詩集とされる『詩経』の巻首も「**関関**雎鳩、在河之洲」と畳語から始まることからも、漢詩文において畳語が如何に重要な語彙であったかが窺える。

こうした畳語は、現代のわが国でも「粛々」「悠々」等々馴染みのある語が多いが、「擬態語、擬声語（オノマトペ）として用いられることが多い」（『漢詩の事典』「重言（畳語）」）とされる様に、漢字の意味に関わらず、中国語としての音そのものが意味を表している場合が多い。そのため、畳語の意味を知るためには中国の生の字音による語感を理解する必要があり、漢語を母語としない上代・中古の本邦の人々にとって、音を意識せずに漢字の意味からある程度解釈できる一般の漢語よりも、畳語は受容し駆使するのが困難であったのではないか、と考えられる。

例えば、先の「古詩十九首」の第二聯後半の「札札」は、「はたを織る音」（『大漢和辞典（修訂第二版）』より、以下『大漢』と略記）を表しているが、これは「札」の基本の字義「ふだ」（『大漢』）から推測することができず、中国音「サツサツ」（便宜的に本邦音読みで表した、以下同じ）もしくは文脈から、語の意味を理解しなければならない。また、よしんば文脈から「はたを織る音」だと推測できても、音の感じ方や擬し方には中国と本邦の文化的な差異もあるため、「サツサツ」が「素早く機織りをするさま」なのか「静かに黙々と機織りをするさま」なのかなど、音による細かな情景描

写まで理解するのは、漢語母語話者ではない本邦人にとって至難の業だったのではないだろうか。『詩経』巻首の「関関」も、「鳥の和ぎ鳴く声」（『大漢』）とされるが、これも「関」の基本の字義「くわんのき」（『大漢』）に拠らない用法であり、また「和ぎ」という情景を、本邦人が「カンカン」の音そのものから感じることは難しいのではないだろうか。

ただ、畳語には先掲の「古詩十九首」第十首末聯の「盈盈」（「水の満ちるさま」『大漢』）や「眽眽」（「見るさま」『大漢』）の様に、それぞれ基本的な字義「盈」（「みちる」『大漢』）、「眽」（「ぬすみ見る」『大漢』）から意味が推測できる語も少なくはない。しかし、こうした一見意味の推測が容易な畳語に関しても、二字一纏まりの反復音による細かな情感までは、漢語母語話者以外が理解するのは困難と思われるため、漢語擬音語としての本邦における受容の難しさに違いはないと考えられる。

畳語はあくまでも音が主であるという認識は、本邦においても訓読の際、例えば「盈」一字であれば「みちる」等と訓を当てるが、「盈盈」では「エイエイたる」と音で読むことが多い点にも、表れているのではないだろうか。ちなみに、「盈盈」には「女の容貌のしなやかに美しいさま」（『大漢』）の意味もあり、この場合、「盈」の字義「みちる」から畳語としての意味を推測する事は難しいと言える。

また畳語に関しては、受容が難しいことと並んで、本邦独自の語が造られ難いことが想定される。これは先述の通り、畳語は漢字音を主とする語彙であるため、漢語を母語としない本邦人が、感じた音や情感を、漢字の音を用いて漢語畳語を新しく造って表現することは稀であると考えられるためである。

以上、本稿が想定する畳語の特質をまとめると、以下の二点となる。

① 畳語は上代・中古前期の本邦の人々にとって受容が難しかった。

② 上代・中古前期に、本邦独自の畳語が造られることは稀であった。

本稿では、こうした畳語の特質を検証しつつ、また本邦における中国からの畳語の受容の流れを明らかにするため、中国文献の受容が盛んであった上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数の調査を行った。その中でも特に、中古前期に活躍し、数多くの漢詩漢文作品が伝わる菅原道真の畳語の用例について、『菅家文草』『菅家後集』により網羅的に調査を行った。これらの調査により、先述の畳語の特質と共に、畳語から見た上代・中古前期の本邦漢語受容の一端を明らかにできればと思う。

なお、漢語には畳語と同様に、「一字一字の字義にも増して、二字が纏まったときの響き（音価）それ自体が重要な意味を持つ」（『漢詩の事典』「畳韻」）とされる双声・畳韻の語がある。双声は「玲瓏」など「声母（語頭子音）を共有する文字を双べた語。」（『漢詩の事典』）、畳韻は「飄颻」など「同じ韻母と声調を共有する文字

を畳ねた語。」（『漢詩の事典』）であり、畳語は双声かつ畳韻の語、とも換言できる。漢字音を主体とする語彙を扱うという本稿の趣旨からすると、それらの双声語・畳韻語も併せて調査対象とすべきではあるが、今回は同字反復で判別・調査が容易な畳語のみを対象とした。

四、上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数

四―一、調査結果

本章では、上代・中古前期の主な本邦漢詩文集（『懐風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』、『都氏文集』、『田氏家集』、『菅家文草』、『菅家後集』、紀長谷雄作品）における畳語の用例数（異なり語数・延べ語数）を**表一**として示し、その調査結果について考察を行う。比較参考のため、先掲の本邦漢詩文集の他、杜甫・白居易の作品と、『唐詩選』における畳語用例数も掲出した。

《凡例》**表一**　上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数

○　文献については年代順で、本邦、中国の順に排列した。

○　紀長谷雄、杜甫、白居易の作品については便宜上、固有の古典文献ではなく現代の選集に拠って調査した。

○　「成立年」は各文献の成立年を記した。「紀長谷雄」、「杜甫」、「白居易」については作者の没年とした。

○　「作品数」は使用した各調査底本に収載されていた作品の数であり、各調査底本による作品の区切りに従って計上した（作品番号が付されている場合はその数）。但し、それぞれの文献によって詩・賦・願文・対策など含まれる作品も様々で、一作品当たりの語句数の幅も大きいため、「作品数」は厳密に各文献の分量を比較できる指標とはならない。あくまで参考値である。

○　「異なり語数」・「延べ語数」（畳語）は各調査底本の本文に拠って調査した。題・序文での畳語例も計上したが、題で作品本文の冒頭句を便宜的にそのまま題名として扱っていると見られるものについては、本文との重複になるため計上しなかった。また畳語とはならない単なる同字連続、例えば「相公送君君知不―訓読―相公君を送る、君知るや不や。」（『菅家文草』巻第五「左金吾相公、於宣風坊臨水亭、餞別奥州刺史、同賦親字。」初句）等は畳語とは見做さず計上しなかった。この畳語か否かの判断は各調査底本の解釈に従った。なお、畳語としての字数は二字には限定しなかったが、今回の調査では「超超超」の様な三字以上の畳語例は確認できなかった。

○　「一作品当り畳語数」は延べ語数÷作品数、「一畳語の平均使用回数」は延べ語数÷異なり語数として計算し、小数点以下第二位を四捨五入した値を掲出した。但し、先述の通り一作品当たりの語句数は作品により差があるため、この「一作品当り畳語数」もあくまで参考値である。

表一　上代・中古前期の本邦漢詩文における畳語用例数

書名	成立年（西暦）	作品数	異なり語数	延べ語数	一作品当り畳語数	一畳語の平均使用回数	調査底本
懐風藻	七五一年	121	14	17	0.1	1.2	『日本古典文学大系六九』岩波書店
凌雲集	八一四年	92	31	36	0.4	1.2	『校註日本文学大系二四』國民圖書
文華秀麗集	八一八年	144	33	52	0.4	1.6	『日本古典文学大系六九』岩波書店
経国集	八二七年	251	72	117	0.5	1.6	『校註日本文学大系二四』國民圖書
都氏文集	八七九年	72	14	15	0.2	1.1	『都氏文集全釈』汲古書院
田氏家集	八九二年	213	19	20	0.1	1.1	『田氏家集全釈』汲古書院
菅家文草 菅家後集	九〇三年	676	117	263	0.4	2.2	『日本古典文学大系七二』岩波書店
（紀長谷雄）	九一二年	108	36	44	0.4	1.2	『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』和泉書院
（杜甫）	七七〇年	725	151	307	0.4	2.0	『杜詩』（全八冊）岩波書店
（白居易）	八四六年	149	75	125	0.8	1.7	『中国詩人選集　白居易』（上下）岩波書店
唐詩選	一七〇〇年頃	466	75	147	0.3	2.0	『新釈漢文大系一九』明治書院

○「調査底本」の詳しい書誌情報は稿末の参考資料欄に掲載した。

四―二、考察　―上代・中古前期の本邦における畳語用例数の推移

表一中の「延べ語数」や「一作品当り畳語数」の推移から、畳語の用例数が『懐風藻』から『経国集』にかけ、時代が降るに従って増加している傾向が窺える。各資料が含む作品種類の違い（『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』は詩のみを収録しているのに対し、『経国集』は序・対策など散文も含む）も考慮しなければならないが、特に「一作品当り畳語数」を比較した場合、『懐風藻』の0.1例から『経国集』の0.5例への五倍の増加は大きな変化だと言える。勅撰三集筆頭の『凌雲集』でも既に杜甫作品や『唐詩選』と比肩する一作品当り0.4例の畳語使用があり、本邦でも勅撰三集の時代には畳語も一般的な語彙として広く用いられるようになっていたと見られゥ。この、畳語が本邦の漢語受容黎明期（『懐風藻』）には殆ど用いられていなかったが、ある程度漢詩文の内容が成熟した勅撰三集では中国作品と同程度用いられるようになった、という点は、畳語が本邦において当初受容が難しかったという本稿の推定の根拠になるのではないか、と考えられる。

また、「一作品当り畳語数」としては白居易の0.8例が突出しており、白居易作品ではほぼ一作に一語は畳語が用いられていると言える。ただ、白居易作品に畳語が多い結果となったのは、今回の調査に用いた選集の傾向である可能性もあり、改めて調査を期したい。

『菅家文草』『菅家後集』の畳語用例数について特筆すべきは、「一畳語の平均使用回数」の2.2回である。同時代の本邦の私家集を見ても『都氏文集』と『田氏家集』が1.1回、紀長谷雄1.2回であり、個人として同じ畳語を繰り返し用いる傾向は本邦では道真に特有のものだと言える。同じ畳語を繰り返し用いるというのは、その畳語についての理解が進んでおり、様々な情景に応用できたという事ではないだろうか。中国に目を向けると、この「一畳語の平均使用回数」は杜甫2.0回、白居易1.7回であり、同じ畳語を複数回用いる傾向が見られる。『菅家文草』『菅家後集』は『都氏文集』他、同時代の本邦の私家集に比べて収められている作品数が圧倒的に多いため、一畳語が複数回用いられる例も多くなったとも考えられるが、中国の詩人達に近い数値である事は、道真の漢語使用の様相が、中国本土と近似したものであった事が窺える一面と言えよう。

五、『菅家文草』・『菅家後集』作品種類別畳語数

五―一、調査結果

本章では、『菅家文草』『菅家後集』における作品種類別の畳語用例数について考察する。まず調査結果として**表二**を掲出する。畳語の調査方法や「一作品当り畳語数」の計算方法は**表一**と同様である。作品種類の区分については川口久雄校注『日本古典文学大系72菅家文草　菅家後集』に従った。

表二『菅家文草』『菅家後集』作品種類別畳語用例数

作品種類	作品数	異なり語数	延べ語数	一作品当り畳語数	主な畳語例（二例以上用例のある語は用例数を丸数字で記載）
詩	514	97	179	0.3	蕭蕭⑫、行行⑧、悠悠⑧、紛紛⑦、他
賦	4	10	10	2.5	悠悠、済済、鏘鏘、瑟瑟、皤皤、他
銘	3	0	0	0.0	無し
賛	2	1	1	0.5	皎皎
祭文	2	2	2	1.0	慘慘、蕭蕭
記	3	1	1	0.3	在在
書序	5	0	0	0.0	無し
議	2	0	0	0.0	無し
策問	8	8	8	1.0	茫茫、冥冥、孜孜、顕顕、班班、他
対策	2	3	3	1.5	隠隠、鈴鈴、六六
詔勅	9	1	1	0.1	兢兢
太上天皇贈答天子文附中宮状	6	3	3	0.5	急急、子子、孫孫
奏状	29	7	10	0.3	上上③、云云②、一一、区区、他
表状	23	4	8	0.3	云云⑤、念念、生生、区区
牒状	3	1	1	0.3	云云
願文	33	13	29	0.9	云云⑥、一一⑤、七七⑤、種種③、他
呪願文	5	5	6	1.2	種種②、云云、声声、往往、家家
書状	1	1	3	3.0	云云③

五―二、考察　―文種差による畳語使用の傾向

表二から分かる作品種類別の傾向として特筆すべきは、「一作品当り畳語数」で「賦」が2.5例と突出している点である（「書状」の3.0例は全て「云云」によるものなので除く）。続いて「祭文」「策問」「対策」「呪願文」がいずれも一作当り1.0例以上で畳語が多い傾向にあった。これに対し、「銘」「書序」「議」には畳語が用いられていなかった。この差は、「賦」や「対策」等には韻律や修辞が求められ、対する「銘」や「議」等には内容や実務性が求められるといった、作品種類の持つそれぞれの特性が表れたものと考えられる。この調査結果から、畳語は対句や音韻を重視する文体においてより多く用いられていたと考えられるが、「詩」においては一作品当り0.3例の使用に止まっており、その傾向が見られない。同じ韻文でも「詩」と「賦」で畳語の使用頻度に大きな差があると言える。ただ、『菅家文草』『菅家後集』の「賦」は4作しかないため、作品種類としての「賦」に畳語が多い特徴があるのではなく、偶然この4作に畳語が多かっただけ、という可能性も考えられる。

また、『菅家文草』『菅家後集』以外の今回調査した文献の中で、特に作品の種類による畳語用例数の差が顕著に見られたのは、『経国集』の「策問」と「対策」であった。『経国集』巻二十「策下」（「策上」を収めていたと思われる巻十九は現存しない）には「策問」（問題文）とそれに対する「対策」（答案）が26対、計52作品収められているが、その「策問」中には畳語が1例「彬彬」しか用いられていないのに対し、「対策」中には19例もの畳語が確認できた。問題文である「策問」の方が「対策」よりも短文である点を差し引いても、明らかに作品種類による差があると言える。「対策」は「上代散文の完備した姿は、美辞的中国文学的見地からみれば、この対策文に集中される」（小島（一九六八））と評される文体であり、特に文章の美しさ、調子を整えるために畳語が多く用いられたとも考えられる。ただ、**表二**の通り『菅家文草』においては、「策問」にも一作品当り1.0例と、「対策」の一作品当り1.5例と同程度畳語が用いられており、『経国集』の様な顕著な差は見られない。これは問題文である「策問」にも修辞に拘った道真の性格の表れなのかも知れないが、『経国集』における傾向のみで「対策」の方が「策問」より美文調で畳語が多い、とは言い切れない可能性もある。「策問」と「対策」の更なる用例調査が必要であり、今後の課題としたい。

六、『菅家文草』『菅家後集』畳語全用例

六―一、調査結果

本章では、『菅家文草』『菅家後集』（以下**『文草』『後集』**と略記）で用いられた畳語用例を具体的に見ていきたい。以下**表三**として、『文草』『後集』から抽出した全ての畳語を掲載する。

《凡例》**表三**『菅家文草』『菅家後集』畳語用例

○　調査底本には川口久雄校注『日本古典文学大系72菅家文草　菅家後集』（以下『**川口大系**』と略記）を使用した。『川口大系』における旧字体については、解釈に支障のない限り新字体に直した。また、『川口大系』本文では字の連続は踊り字「〻」で表記されているが、本表掲載の畳語の踊り字は正字に直した。なお、20「皎皎」について、詩一九三では日扁の「晈〻」であったが、「晈」は『大漢和辞典（修訂第二版）』によると「皎と同じ。」とされていたため、「皎皎」と「晈晈」は同一語として扱った。

○　畳語の調査範囲は本文および題・序とした。畳語とはならない単なる同字連続（「相公送君、君知不―訓読―相公君を送る、君知るや不や。」等）は、調査底本の解釈に従って除外した。8「云云」（文末の省略語）、45「七七」（四十九の意）、55「上上」（対策の判定で「上の上」の意）、117「六六」（三十六の意）の四語は、九九や記号的な意味の特殊な畳語ではあるが、参考として掲出した。（語の上の算用数字は当表の「通番」を表す、以下同じ）

○　排列は字音（本邦の音読み）の五十音順で、「通番」はその通し番号である。

○　「用例のある詩文番号」欄には各畳語用例のある作品の『川口大系』での詩文番号を示した。一作中に同じ畳語が二回以上用いられている場合には、括弧書きでその回数を示した（例えば三八八（六）は三八八の作中に六例その畳語が用いられていることを示す）。原典としては詩文番号一～四六八が『文草』巻一～巻六（詩篇）、**四六九～五一四**が『後集』、五一五～六七五が『文草』巻七～巻十二（文章篇）に当たり、区別のため『後集』作品については詩文番号を**太字ゴシック体**に、『文草』巻七以降の文章篇の作品については詩文番号に傍線を付した。六七六「奉昭宣公書」は『文草』『後集』には収載されていない『川口大系』による補遺の作品であるが、道真の作とされているため調査対象に含めた。制作年代としては、詩については詩文番号順がほぼ制作の順になる（『川口大系』「菅原道真年表」より）が、『文草』巻七～巻十二（詩文番号五一五以降）の文章篇については作品種類別に編纂されているため、必ずしも詩文番号の順が制作の順とはならない。

○　「用例数」欄には各畳語の『文草』『後集』中における用例数を示した。

○　「日国初出」欄には『日本国語大辞典（第二版）』（以下『**日国**』と略記）における各畳語の本邦初出例について、『文草』『後集』例の扱いを以下の記号の通り示した。

◎…『文草』『後集』の用例が本邦初出例として挙げられていた語。

○…『文草』『後集』以降の本邦文献の用例が初出として挙げられていた語。何らかの要因から『文草』『後集』の用例が収

載されなかったものと考えられる。初出例として掲載されている後世の出典文献名も記し、『文草』『後集』以前の文献と区別のため**太字ゴシック体**で記した。

×…『文草』『後集』より古い本邦文献の用例が初出として挙げられていた語。道真以前から本邦で用いられていた畳語であると言える。初出例として掲載されている出典文献名も記した。

|…熟語として立項のない語。

○「全唐詩／用例数〔資料〕」欄には『全唐詩検索系統』（以下『**全唐詩**』と略記する）における各畳語の用例の有無と用例数を示した。この用例数は、『全唐詩』により機械的に畳語を検索した結果を示したため、畳語ではない単なる同字連続（例えば「使君何在、在江東—訓読—使君何くにか在る、江東に在り」白居易「宿竇使君荘水亭」等）を含む可能性がある。この欄で用いた記号の意味は以下の通り。

○…『全唐詩』に用例のある語。

白無…『全唐詩』に用例のある語の内、白居易の用例が無い語。『全唐詩』には白居易の、詩以外の作品は収められていないため、白居易が詩に用いなかった畳語、と言える。

×…『全唐詩』に用例の無い語。

＊…用例数の内、異体字での用例も含むもの。表中「語」として掲載した字体以外に通用される異体字がある畳語については、それらの異体字も含めて『全唐詩』の検索を行った。検索に用いた異体字は用例数欄内に記載した。

〇…『全唐詩』に用例の無かった語について、その畳語の用例が確認できたその他の中国文献名を示した。中国文献の用例調査には、『大漢和辞典（修訂第二版）』、『漢語大詞典』、『佩文韻府』、『漢籍電子文献資料庫』、『中国哲学書電子化計画』を使用した。

表三　『菅家文草』『菅家後集』畳語用例

通番	語	用例のある詩文番号	用例数	日国初出	全唐詩／用例数〔資料〕
1	靄靄	一〇	1	× 性霊集	○ 47
2	藹藹	四四九	1	◎	○ 56
3	依依	三二三	1	× 懐風藻	○ 246
4	一一	四六、三九八、六〇三、六三九、六四一、六五五、六六〇、六六七	8	× 梵網経開題	○ 111

5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
殷殷	隱隱	鬱鬱	云云	営営	厭厭	汪汪	往往	呵呵	顆顆	家家	各各	欵欵	急急	汲汲	皎皎	兢兢	怳怳	空空
五六一	五六七	二六九	三八八（六）、六〇五、六〇六、六一二、六一三、六一五、六三〇、六三一、六三三、六三八、六四〇、六六二、六七一、六七六（三）	三七四、**四八四**	二九九	九	六七〇、六七四	一二一	**四八九**	六七〇	九	三六五	一一七、五八一	二九二、五五八	一九三［皎皎］、五二二	**四七八**、**四八四**、五七二	**四八四**	二八四
1	1	1	21	2	1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	2	3	1	1
○	×	◎	○	◎	○	×	○	◎	◎	○	○	○	◎	◎	×	◎	×	◎
色葉字類抄	三教指帰		**百座法談**		**本朝文粋**	三教指帰	**本朝続文粋**			**宇津保物語**	**本朝文粋**	**本朝文粋**			万葉集		性霊集	
○白無	○	○	○	○	○	○白無	○	○白無	○白無	○	○白無	○白無	○白無	○	○	○白無	○	○白無
14	59	74	22	55	12	8	148	1	1	110	13	8＊款	6	18	67	10	5	12

24	区区	一二二、二三六、四二三、六〇一、六一四	5	1	◎			○	○	46
25	煢煢	八二	1	1	◎			○白無	○白無	4＊煢
26	脛脛	**四八四**	1	1	◎			×	×〔漢書〕	
27	喧喧	四三七	1	1	◎			○	○	76
28	蹇蹇	五一六	1	1	◎			○	8＊謇	
29	顕顕	五五九	1	1	—			×	×〔詩経〕	
30	行行	七五、二〇一、二一九、三〇〇、三〇一、三九〇、四三一、四五九、六四四	9	1	×	懷風藻		○	○	135
31	耿耿	三一六	1	1	◎			○	○	88
32	咬咬	四五七	1	1	—			○白無	○白無	4
33	荒荒	**四八四**	1	1	◎			○白無	○白無	4
34	煌煌	五一六	1	1	○	**新撰朗詠集**		○	○	51
35	嗷嗷	二三六	1	1	◎			○	○	22
36	璅璅	**四八四**	1	1	◎			×	×〔晋書、文選〕	
37	在在	四三三、四四八、五二六、六六一	4	4	◎			○	○	3
38	嘖嘖	**四七七**	1	1	◎			○	○	13
39	颯颯	三〇六、四六四	2	2	×	性霊集		○	○	81
40	慘慘	七五、五二四	2	2	○	**海道記**		○	○	32
41	孜孜	二九二、五五八	2	2	◎			○	○	18
42	子子	五八一	1	1	×	続日本紀		○白無	○	5

43	事事	二一九、二五九、四三六	3	◎		○	51
44	時時	二四七、**四七六**	2	×	万葉集	○	198
45	七七	一二九、六四六、六五二、六六〇	4	×	続日本紀	○白無	2
46	叱叱	一一	1	○	**漢書列伝竺桃抄**	×	〔説苑〕
47	瑟瑟	九二、三七〇、五一五	3	◎		○	51
48	灼灼	二六二、四五七	2	×	万葉集	○	44
49	種種	六三九、六五四、六六四、六六九、六七一	5	×	万葉集	○	6
50	脩脩	四〇二	1	◎		○	5
51	処処	四三三、六六一	2	×	懐風藻	○	348
52	如如	六五五	1	×	性霊集	○	8
53	蕭蕭	七五、七六、九二、一三九、二六四、三三三、三三六、三四九、四四三、四四九、**四七四**、**四八〇**、五二四	13	◎		○	336
54	穣穣	五六	1	◎		○	17
55	上上	五九四（三）	3	○	**本朝文粋**	○白無	9
56	人人	六〇二	1	○	**源氏物語**	○	75
57	寸寸	三五五	1	×	経国集	○	14
58	世世	二七九	1	○	**古今和歌集**	○	11
59	済済	二八、五六、五一六	3	×	懐風藻	○白無	28
60	声声	五二、**四七二**、**四八九**、六六九	4	◎		○	81

61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
生生	青青	繊繊	芊芊	漸漸	鏘鏘	忿忿	蔟蔟	叢叢	蒼蒼	孫孫	代代	団団	遅遅	朝朝	惵惵	適適	度度	鼕鼕	蕩蕩
五三、六一七、六五三	一五四、二一九	三六、一九三	**四八四**	二五六、二七五、**四八四**	二八、五一六	一一、三九、五二七	三九	四二九	五一七	五八一	一三六、六五三	四〇八	三六五、四二六、**四七七**	**五〇七**	五六二	四九	六〇一	七四	九八
3	2	2	1	3	2	3	1	1	1	1	2	1	3	1	1	1	1	1	1
○	×	×	×	◎	×	◎	◎	◎	×	×	◎	×	×	×	—	—	○	◎	◎
山鹿語類	性霊集	三教指帰	文華秀麗集		三教指帰				三教指帰	続日本紀		文華秀麗集	懐風藻	経国集			**今昔物語集**		
○	○	○	○	○	○	○	○	○白無	○	○白無	○白無	○	○	○	×	×	○白無	○	○白無
13	237	60	34	31	32	34＊匆忽	7	22	367	3	1	59	139	163	〔後漢書、文選〕	〔荘子〕	3	23	21

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
穆穆	茫茫	歩歩	片片	冪冪	芬芬	紛紛	分分	淼淼	眇眇	飄飄	微微	霏霏	班班	漠漠	皤皤	念念	日日	喃喃	騰騰
五一六	八八、二二四、二三六、三三四、**四七九**、五六二	**四七二**	八五、三七三	**四八四**	一三五	七三、八〇、九九、一五〇、一九七、三九四、**四九〇**	六〇、三五五	二三六、三三三、四二二	四、**四七七**、六四四	三七三	一一七、一六三、二七五、四五四、**四八四**、**五〇六**、六六七	七九	五六一	七九	二二八、二六二、三七〇、四二二、五一六	五二、七五、三〇〇、三五一、三九〇、**五〇〇**、六一七	三〇一	**四七七**	三〇八
1	6	1	2	1	1	7	2	3	3	1	7	1	1	1	5	7	1	1	1
×	◎	◎	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	◎	×	×	×	◎	◎
懐風藻			経国集	経国集	性霊集	凌雲集	**今昔物語集**	三教指帰	経国集	懐風藻	凌雲集	懐風藻	凌雲集		三教指帰	維摩経義疏	経国集		
○白無	○	○	○白無	○	○白無	○	○白無	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27	280	75	67	28	3	309	1	24	28	94	97	107	5	202	11	8	287	11	64

101	冥冥	八六、二一五、**五〇九（二）**、五五九	5	◎		○	132
102	明明	三五七	1	◎		○	31
103	綿綿	三七五	1	×	文華秀麗集	○	65
104	濛濛	二六九	1	×	文華秀麗集	○	114
105	夜夜	一九八、二一〇、三一七、**五〇七**	4	×	経国集	○	161
106	悠悠	四、五九、九八、二八七、三〇〇、三六〇、四〇六、四三七、五一五	9	×	正倉院文書・天宝勝宝八年	○	713
107	遥遥	三三	1	×	文華秀麗集	○	68
108	爛爛	四四三	1	×	三教指帰	○	6
109	離離	一〇	1	◎		○	82
110	略略	**五〇六**	1	—		○	4
111	凜凜	二九九、五一七	2	◎		○	23
112	懍懍	**四八四**	1	◎		○白無	3
113	冷冷	三一二	1	×	懐風藻	○	114＊泠
114	鈴鈴	五六七	1	—		×	〔漢書、爾雅〕
115	漣漣	一一七	1	×	三教指帰	○	8
116	連連	**四八四**	1	×	三教指帰	○	24
117	六六	五六七	1	—		○白無	1

以上の**表三**中、『全唐詩』における用例の有無、『全唐詩』中の白居易作品における用例の有無、「日国初出」の用例の扱いについて、項目ごとの語数を次の**表四**にまとめた。語数の割合については、百分率小数点以下第二位を四捨五入した数値である。

表四　『菅家文草』『菅家後集』畳語の項目別語数と割合

項目	分類	語数	割合
『全唐詩検索系統』に用例があるか	用例あり	110	94.0%
	用例なし	7	6.0%
	合計	117	100.0%
白居易詩（『全唐詩検索系統』所収）に用例があるか	用例あり	83	70.9%
	用例なし	34	29.1%
	合計	117	100.0%
『日本国語大辞典（第二版）』における『菅家文草』『菅家後集』用例の扱い	『菅家文草』『菅家後集』例が初例掲載（◎）・『菅家文草』『菅家後集』以後の例が初例掲載（○）	60	51.3%
	『菅家文草』『菅家後集』以前の用例掲載あり（×）	50	42.7%
	熟語として立項なし（—）	7	6.0%
	合計	117	100.0%

六—二、考察　—『菅家文草』『菅家後集』の畳語の特徴

以下、**表三・表四**から読み取れる『文草』『後集』畳語の特徴を列挙してみる。

① 用例数が多いのは、記号的な8「云云」を除くと53「蕭蕭」（十三例）、30「行行」（九例）、106「悠悠」（九例）の順で、これらは三語共それぞれ一例を除いて全て詩中に用例があり、道真詩に多用された畳語であると言える。特に53「蕭蕭」については、

『文草』七五から『後集』**四八〇**まで幅広い時期の用例があり、道真が生涯を通して詩に用いた畳語と言える。

② 全一一七語の半数を超える六〇語が『日国』にて本邦の初出例、もしくは後世の文献が初出例とされており、道真が数多くの畳語を先進的に用いていた事が窺える。なお、『文草』『後集』に用例がありながら『日国』では後世の例が初出例とされていた語として、「殷殷」「云云」「厭厭」「往往」「家家」「各各」「欵欵」「煌煌」「慘慘」「叱叱」「上上」「人人」「生生」「度度」「分分」の十五語があるが、特に詩以外の作品中の用例である等の共通点は見受けられないため、単に『日国』の用例調査から漏れてしまったものと考えられる。

③ 『全唐詩』に用例が無い畳語（「脛脛」「顕顕」「璅璅」「叱叱」「惵惵」「適適」「鈴鈴」の七語）にも全て『漢書』や『文選』等の中国文献に用例があり、『文草』『後集』のみに見られる独自の畳語は無かった。但し、各畳語の『文草』『後集』での用法が『全唐詩』を含む中国文献での用例と同じであるかについては未確認であり、同じ語でも中国例とは全く関連を持たない、『文草』『後集』独自の意味や用法で用いられている畳語がある可能性はある。

④ 七割以上（八三語）の畳語が、『全唐詩』中の白居易の作品でも用例が見られた。道真がそれらの畳語全てにおいて白居易の作品を典拠としたとは必ずしも言えないが、畳語の使用においても白居易作品の語彙の影響を強く受けていたのではないかと考えられる。

以上四点の特徴の中でも特筆すべきは、③の「『文草』『後集』のみに見られる独自の畳語は無かった」点であろうか。これは一一七語もの畳語がありながら全てに中国の用例が存在する事を意味し、『文草』『後集』における中国例から外れた表現、所謂和習も屢々指摘される（川口久雄（一九八一）など）中、畳語については一まず、中国に例の無い語彙は用いられていないと言うことになる。

この、『文草』『後集』の畳語に中国例に見られない語が無かった点については、以下の二点が要因として考えられる。一つ目は、畳語には本邦独自の造語がなされにくいという、本稿第三章で推定した畳語の特質のため、『文草』『後集』でも畳語には本邦独自の和習的な語彙が見られなかったというものである。

二つ目は、そもそも道真作品の和習としては、これまで文法や語の意味用法に対しての指摘がなされているだけで、中国に例の無い本邦独自の造語という観点では元来指摘はなされていない、というものである。以下、今回確認できた道真の和習に関する指摘を二件掲載する。

○ 川口久雄（一九八一）※傍線筆者

「彼の詩文における疑問や反語の表現には、漢文の正格から逸

脱したものが散見する。」

「四句じたての造句法は入矢義高教授の指教によれば、中国の造句法からみて異様であり、日本的な造句だという。」

「「不屑」はいさぎよしとしないという原意であるが、（筆者中略）「不顧」の意に誤用しているのである。「斗藪」は衣食住の三種の欲望をはらいすてるという意味の仏教語の他動詞であるのに、名詞化した修飾語としてつかい」

○　静永健（二〇〇二）※傍線筆者

「現在、菅公の詩歌において「和習」と判断されるその殆どの表現が「文法」としては確かに唐詩の規準からは外れるものの「平仄」という音律面での諧調は決して崩していない」

この様に、これまで指摘されてきた道真作品の和習は、疑問や反語といった表現法や、造句法、意味用法に関してのものであり、本邦独自の漢語の造語についての指摘は確認できなかった。和習とは本邦独自の和製漢語があるかどうかではなく、文法や語法が正格であるかどうかに焦点が当てられてきたのである。

この点から見ると、畳語に関しても、中国に用例が有るか無いかだけではなく、意味用法が中国例に準じているかを確認しなければ、本質的に和習がないと判断することはできないと言える。本稿では紙幅の都合から、『全唐詩』に用例が無く、且つ『文草』散文中に用いられた畳語に絞って、次章にて中国の典拠を確認し、和習の有無について考察を進めたい。その他の畳語の中国典拠の確認については、中山（二〇二二）の他、別稿を予定している。

七、『菅家文草』の散文における畳語の中国典拠

本章では、『全唐詩検索系統』に用例が無く、且つ『菅家文草』（以下『**文草**』と略記）散文中に例のある29「顕顕」、76「喋喋」、77「適適」、114「鈴鈴」（算用数字は**表三**の「通番」、以下同じ）の四語について、中国例での用法に準じているかを確認してみたい。各語ごと項を分けて考察していくが、77「適適」については本稿での校異の結果、畳語例ではなかったと考えられたため、29「顕顕」、76「喋喋」、114「鈴鈴」の三語を先にまとめ、77「適適」の考察は末尾に置いた。なお、四語とも『日本国語大辞典（第二版）』には立項がなかった。

《凡例》以下（ア）～（エ）畳語用例考察

○　各畳語の『文草』における用例数（四語とも一例ずつ）と、用例を確認できた唐以前の中国文献における用例数を示した。複数の文献に用例が確認できた語については、代表的な文献を示すにとどめた。中国例については『大漢和辞典（修訂第二版）』（『**大漢**』と略記、以下同じ）、『漢語大詞典』（『**漢詞**』）、『佩文韻府』、『漢籍電子文献資料庫』、『中国哲学書電子化計画』、『ＳＡＴ大蔵

経データベース2018』（『**大蔵経**』）により調査した。また『文草』の用例について、訓読した際の日本語としての品詞を用例数下に参考として示した。

○『文草』の用例に当てはまる語釈を『大漢』と『漢詞』より抜粋して示した。

○ 用例文は『文草』例には頭に◎、中国文献の例には頭に○を付して掲出した。『文草』例には『日本古典文学大系72菅家文草菅家後集』（『**川口大系**』）の詩文番号・作品種類・題名を、中国文献例には出典文献名・章名等を記し、その下に、作品の全文なのか一部分なのか等、引用の形態についても示した。用例文の底本は『文草』については『川口大系』を使用し、中国文献例の底本はそれぞれ［］内に示した。史書の底本とした［宋紹興本］等については、本文を『漢籍電子文献資料庫』又は『中国哲学書電子化計画』により参照した。訓読文の典拠についてはその都度用例文末に記載し、特記の無いものは筆者が試みに書き下したものである。

○ 用例文中、当該畳語は**太字ゴシック体**にし直傍線を、解釈上関連が深いと思われる語句には波傍線を付した。傍線は特記の無い限り筆者が付したものである。

（ア）29【顕顕】

◎『文章』五五九策問「徵魂魄。」（部分）

若為招、　若し招を為さば、
則如来更悲、　則ち如来　更に悲しび、
叫昊穹以過礼。　昊穹に叫びて以て礼を過ぐ。
亦有仮魄為鬼、　亦有（あ）るいは魄を仮りて鬼と為り、
復土者既入冥ニ。　土に復る者は既に冥冥に入る。
名魂以神、　魂を名づくるに神を以てし、
帰天者遂資**顕ニ**。　天に帰る者は遂に顕顕を資く。
城陽会稽之祠廟、　城陽会稽の祠廟、
主之者誰。　之を主とするは誰ぞ。

※訓読は『川口大系』の訓点に従って筆者が試みた。振り仮名は『川口大系』による。

まず、本稿の調査で、この『文草』五五九における「顕ニ」例については異文が確認できた。この五五九の「顕ニ」について、『川口大系』の底本である藤井懶斎奥書本（柳澤（二〇〇八）にて確認）を参照したところ、「顕ニ」ではなく、明らかに「顯ニ」（扁が「景」、踊り字ママ）に作られていた。この本文の異同について、『川口大系』では特に注記等はなされておらず、『川口大系』における単なる翻刻の誤りなのか、「顕ニ」に意図的に校訂されたものなのかは不明である。ただ、この他今回参照した早稲田大学図書館蔵寛文七年跋版本、国立国会図書館蔵元禄十三年跋版本（いずれもオ

ンラインで確認）では、二本とも『川口大系』と同じ「顕顕」（踊り字使用なしママ）に作られていたため、これらの版本を元に『川口大系』でも「顕こ」に校訂がなされた可能性が考えられる。

しかし、本稿としては藤井懶斎奥書本を重視し、改めてこの五五九では「顕顕」と「顥顥」どちらがより相応しい表現か、以下両語の辞書語釈と用例を確認して検討を試みたい。

〈顕顕〉

用例数『文草』1例（名詞、異文あり）、『詩経』1例、『晋書』2例、他

辞書語釈『大漢』「あきらかなさま。」、『漢詞』「鮮明貌。」

○『詩経』大雅、仮楽（部分）［『新釈漢文大系112詩経　下』］

仮楽君子　**顕顕**令徳　　仮楽する君子　顕顕たる令徳

宜民宜人　受禄于天　　民に宜しく人に宜し　禄を天より受く

保右命之　自天申之　　保右し之に命じ　天より之を申ぬ

※訓読は底本による

○『晋書』巻第五十一列伝第二十一皇甫謐（部分）［金陵書局本］

故能棄外親之華、　故に能く外親の華を棄て、

通内道之真、　内道の真に通じ、

去**顕顕**之明路、　顕顕の明路を去り、

入昧昧之埃塵、　昧昧の埃塵に入り、

「顕顕」については、『大漢』の語釈にもある通り、「あきらかなさま。」の意味で、引用した『詩経』の「令徳」や『晋書』の「明路」といった名詞に前から係る形容詞的な語であることが確認できる。

〈顥顥〉

用例数『文草』1例（名詞、異文あり）、『楚辞』1例、『蔡中郎集』1例、『広弘明集』1例

辞書語釈『大漢』「光るさま。また、白いさま。」、『漢詞』「潔白有光貌。」

○『楚辞』「大招」（部分）［四部叢刊初編］

魂乎無北　　魂　北すること無かれ

北有寒山逨龍赩只　　北は寒山逨龍の赩たるあり

代水不可涉　　水に代はれども渉るべからず

深不可測只　　深きは測るべからず

天白**顥顥**　寒凝凝只　　天白く顥顥として　寒は凝凝たり

魂乎無往盈北極只　　魂　往きて北極を盈たすこと無かれ

魂魄帰徠間以静只　　魂魄帰り徠る間　静を以てす

○『蔡中郎集』巻四「述行賦」（部分）［欽定四庫全書］

弥信宿而後関兮　　弥信宿して後に関む

思逶迤以東運　　思ひ逶迤として以て東運す

見陽光之顥顥兮　　陽光の顥顥たるを見れば

懐少弭而有欣　　懐少しく弭ひて欣有り

○『広弘明集』巻第二十九統帰篇序　江淹「傷愛子賦」（部分）［『大蔵経』］

惜哉遘閔渉歳而卒　　惜しいかな　閔に遘ひ歳を渉りて卒す

悲至躑躅迺為此文　　悲しび至り躑躅して迺ち此の文を為す

惟秋色之顥顥　　惟だ秋色の顥顥たるや

心結縹兮悲起　　心結縹して悲しび起く

「顥顥」の意味としては、以上の三例から、「陽光」や「秋色」等の光の様子を修飾する語であると考えられ、文法的には『楚辞』の「天」や『蔡中郎集』の「陽光」、『広弘明集』の「秋色」など、被修飾語より後ろに置かれている点が特徴と言える。この点は被修飾語の前に置かれる例が見られた「顕顕」とは対照的である。また、一列目の『楚辞』「大招」は、遠くに彷徨う魂を呼び戻そうとする内容の作品であり、「顕顕（顥顥）」を含む『文草』五五九「徴魂魄。」と主題が類似している点が注意される。

以上、「顕顕」も「顥顥」も「あきらか」「光る」という点では類義と見られ、両語とも『文草』五五九中で対になっている「冥こ」（原義として「暗い」）と対応することができ、意味の上ではどちらとも可能性があると言える。ただ、五五九「徴魂魄。」の「魂」に関する主題は「顥顥」例がある『楚辞』「大招」に関連しているとも考えられ、また、『文草』では「帰天者遂資顥こ」と句末に用いられている点も、中国例としては「顥顥」に多く確認できた（「顕顕」は被修飾語の上に付く例が多く、句末に置かれる例は今回確認できなかった）。よって本稿としては、『文草』五五九では「帰天者遂資顥こ」が本来の表現であり、『楚辞』「大招」等の中国例に拠った可能性のある用例であると考えたい。

ただ、『文草』では「帰天者遂資顥こ」と、「顥顥」が「資」の目的語になる名詞的用法と見られ、この点は形容詞的用法しか確認できなかった中国例の「顥顥」および「顕顕」とは異なっている。しかし、形容詞的な畳語を名詞化して目的語として用いる例は、『文草』五五九で「顥こ」の対となっている「冥こ」（原義は形容詞的な「㊀暗いさま。」だが、ここでは目的語名詞としての「㊁冥土。」の意、いずれも『大漢』より）など、中国にも見られるため、漢文の正格から外れた表現とは言えないと考えられる。なお、『文草』五五九のこの「帰天者遂資顥こ」の文意は、「顥顥」でも「顕顕」でも通じ難く（「資」の訓は「たすく」でよいか等）、「顥顥」を目的語と捉えず、「天に帰る者は遂に資して顥顥たり」と訓むことも

可能ではないかと思われる。文意の解釈については今後の課題としたい。

（イ）76【**偞偞**】

用例数『文草』1例（形容動詞）、『後漢書』1例、『晋書』4例、他

辞書語釈『大漢』「おそれるさま。」、『漢詞』「恐惧貌。」

◎『文草』五六二策問「通風俗。」（後略）

問、茫〻分野、　問ふ、茫茫たる分野、
応景福之昭回。　景福の昭回に応ふ。
偞偞黎民、　偞偞たる黎民、
繫君王之政化。　君王の政化を繫ぐ。
故方俗随人以立、　故に方俗人に随ひて以て立ち、
陶情性於寒温。　情性を寒温に陶（みが）く。

※訓読は『川口大系』の訓点に従って筆者が試みた。振り仮名も『川口大系』による。

○『後漢書』巻四十一列伝第五鍾離宋寒　寒朗（部分）［『全訳後漢書14列伝四』］

禽虫畏徳、子民請病。　禽虫は徳を畏れ、子民は病を請ふ。
意明尊尊、　意は尊を尊とするを明らかにし、
割恩蕃屏。　恩を蕃屏に割く。
偞偞楚黎、寒君為命。　偞偞たる楚の黎、寒君を命と為せり。

※訓読は底本による

「偞偞」は恐れる様子を表す畳語で、特に民が諸侯等に対して抱く恐れの感情に対して用いられていると考えられる。『文草』例では「黎民」（「もろもろのたみ。」『大漢』、「黎」のみでも「民衆。」『漢詞』）に係っているが、引用した『後漢書』例でも「楚黎」に係っており、共に「黎」に係る点が特徴と言える。この他、『晋書』巻百七載記第七石季龍下でも「**偞偞**遺黎、求哀無地」と「黎」に係る例があり、『文草』五六二の「偞偞」はこれらの中国史書の用例に準じて用いられていると考えられる。

（ウ）114【**鈴鈴**】

用例数『文草』1例（形容動詞）、『漢書』1例

辞書語釈『大漢』「地の動くさま。」、『漢詞』「象形詞。」

◎『文草』五六七対策「辨地震。」（部分）

苟君臣得道、　苟も君臣道を得るときは、
則隠隠呑声、　則ち隠隠として声を呑み、
而山車転輪。　山車輪を転ず。
苟政教惟治、　苟も政教惟れ治るときは、

則**鈴こ**絶響、　則ち鈴鈴として響き絶え、
而浪井飛液。　浪井液を飛ばす。
※訓読は『川口大系』の訓点に従って筆者が試みた。

○『漢書』巻二十六天文志第六（部分）［王先謙漢書補注本］
丙戌、地大動、**鈴鈴**然、　丙戌、地大いに動き、鈴鈴然たり、
民大疫死、　民大いに疫死し、
棺貴、至秋止。　棺貴し、秋に至りて止む。

「鈴鈴」は地震の揺り動く様を表す畳語と見られるが、今回の調査では例示した『漢書』の一例しか確認できなかった。『漢書』の「鈴鈴」は「然」が付く形になっており、その点は『文草』例と異なるが、地震の形容である点は共通しており、『文草』の「鈴こ」例も、こうした中国例に準拠した表現であると考えられる。

以上、『文草』における（ア）「顥顥（顕顥）」、（イ）「喋喋」、（ウ）「鈴鈴」の三語の畳語については、いずれも例示した様な中国例に準じて用いられていることが確認できた。

（エ）77【適適】

用例数『文草』1例（副詞）、『荘子』1例、『捜神記』1例

辞書語釈『大漢』「㊀驚き視るさま。びつくりして気抜けするさま。㊁適するところを楽しむ。」、『漢詞』「〈都歴切〉分明、清楚。〈他歴切〉驚恐失色貌。」※いずれも『文草』例には合致しない語釈であるが、参考として引用した。

◎『文草』四九詩序「晩冬過文郎中、翫庭前早梅。」（部分）
我党五六人、　我が党五六人、
適こ遇郎中之暇景、　適適郎中の暇景に遇ひて、
聊敍詩酒之歓娯。　聊かに詩酒の歓娯を敍べぬ。
推歩年華、厳冬已晩、　年華を推歩すれば、厳冬已に晩れ、
具瞻庭実、　庭実を具瞻すれば、
梅樹在前。　梅樹前に在り。
※訓読は『川口大系』の訓点に従って筆者が試みた。振り仮名は全て『川口大系』による。

「適適」は『文草』『後集』中でもこの詩序における一例があるのみだが、この「たまたま」の意味の用法は中国例としては今回確認できず、『大漢』・『漢詞』でも語釈として確認できなかった。ただ、意味の異なる「適適」例として、道真以前の用例では『荘子』と『捜神記』（東晋成立、『漢詞』語釈によると「分明、清楚。」の意の用例）の二例を確認できた。以下『荘子』の例を見る。

○『荘子』外篇、秋水第十七（部分）［『新釈漢文大系8荘子　下』］

東海之鱉左足未入、
而右膝已縶矣。
於是逡巡而却、
告之海曰、
（中略）
於是埳井之鼃聞之、
適適然驚、
規規然自失也。

※訓読は底本による

東海の鱉左足未だ入らずして、
右膝已に縶す。
是に於て逡巡して却き、
之に海を告げて曰く、
是に於て埳井の鼃之を聞き、
適適然として驚き、
規規然として自失せり。

これは現代でもよく知られた「井の中の蛙」の説話の一節で、「東海之鱉」から海の広大さを聞いた「埳井之鼃」が、驚いて腰を抜かす様子に「適適」が用いられている。この『荘子』の「適適」は直後の「驚」に係っているように、「恐れるさま」（『新釈漢文大系 8 荘子　下』語釈）を表現しており、『文草』の「適適」の「たまたま」とは全く異なる意味の用例と言える。

また、『文草』中においても、「たまたま」を表す他の箇所では「刺史**適**生于大江氏。」（六五本文夾註）や「丈人侍郎、**適**依本韻、更詶一篇。」（九七詩題）、「**適**至夏末、已遇花時。」（二六二詩序）の様に、「適」一字に作る例が少なくとも三例以上確認でき、「適こ」と畳語に作るのはこの四九詩序での一例のみであった。これは四九詩序の例のみが「たまたま」の訓につられ、漢字も反復してしまった和習的用法とも考えられるが、「若年のおりから『荘子』を耽読」（谷口（二〇〇六））していた道真であれば、先の『荘子』の「適適然」の語例と意味も把握していたはずであり、やはりこの『文草』四九詩序の「適こ」は特異な用例であると考えられる。

そこで、この『文草』四九詩序の「適こ」の箇所について、調査底本の『川口大系』の更に底本である藤井懶斎奥書本（柳澤（二〇〇八）にて確認）を参照したところ、「適こ」の踊り字「こ」が確認できなかった。更に、斯道文庫蔵本（佐藤（二〇〇三）翻刻にて確認）、早稲田大学図書館蔵寛文七年跋版本、国立国会図書館蔵元禄十三年跋版本（以上二本はオンライン上で参照）の三本とも「適」の下に踊り字は無く、「適」一字となっていた。以下各本の異同を**表五**としてまとめた。

表五　『菅家文草』四九「晩冬過文郎中、翫庭前早梅。」詩序中の「適こ」の各本表記

伝本名	確認資料	表記	形態	備考
日本古典文学大系72	川口（一九六六）	適こ	校本	底本は藤井懶斎奥書本
藤井懶斎奥書本	柳澤（二〇〇八）	適	写本	明暦二年跋
早稲田大学図書館蔵本	オンライン公開	適	刊本	寛文七年跋
国立国会図書館蔵本	オンライン公開	適	刊本	元禄一三年跋
斯道文庫蔵本	佐藤（二〇〇三）	適	写本	江戸初期書写

『川口大系』以外の今回調査できた四本の伝本では、全て「適」一字に作られていることが**表五**からも分かる。

また、この「適ゝ」を含む一文は、「ゝ」を削ると「適遇郎中之暇景、聊敍詩酒之歓娯。」と、字数・構文共に対を成す七言句の文になり、その点でも「ゝ」は無い方が適当であると言える。更に、「適」を一字とした場合の「適遇」という表現は、『文草』中に少なくとも二例確認でき（二三六（三）、二四九）、道真の表現として自然な語例であると言える。

以上、①中国における「適適」の用例が「たまたま」を意味しないこと、②『文草』中でも「たまたま」の意として、他の箇所（『川口大系』により確認）では「適」一字に作っていること、③今回確認できた『川口大系』以外の諸本では全て四九詩序の当箇所は「適」一字に作られていたこと、④「適」一字であれば構文的にも整った七言対となること、の四点を勘案すれば、やはり本来踊り字「ゝ」は無かった可能性が高いと言える。ただ、①の中国の「適適」例が「たまたま」を意味しない点については、今後『文草』『後集』の畳語用例の精査を進める中で、中国例とは異なる用法の畳語が確認できた場合、この『文草』四九詩序の「適ゝ」を否定する論拠とはならなくなるが、②以降の論拠だけでも、十分「適」一字に作る方が適当であると判断できると思われる。よって、『川口大系』における四九詩序の「適ゝ」の踊り字は、誤植もしくは今回確認の及ばなかった『川口大系』のその他の校合本による竄入と考えていいのではないだろうか。本稿では、『文草』四九詩序における「適ゝ」は本来「適」一字であって、畳語例ではなかったと考えたい。

本章では『文草』の散文作品の畳語の内、『全唐詩』に例の無かったものについて、中国文献より典拠を確認した。その結果、畳語ではなかった「適適」を除き、いずれも中国例に準じた語彙である事が認められた。一見和習かと思われた「適適遇」の表現も、畳語ではなく「適」は一字の「適遇」であった可能性が高い事が分かり、今回調査した四語については一まず、和習が無い点を確認できた。道真が散文作品においても、中国の畳語を博く且つ正確に引いて用いていた事が見てとれよう。

八、本稿のまとめ　―上代・中古前期における漢語畳語の様相

以上、上代・中古前期の本邦漢詩文集の畳語用例数の推移と、『菅家文草』『菅家後集』の全畳語用例について考察を進めてきた。その中で、本稿第三章で掲げた畳語の二つの特質について、今回の調査により明らかになった点からの検証結果をまとめたい。

まず一点目、「畳語は上代・中古前期の本邦の人々にとって受容が難しかった。」点については、第四章**表一**から分かるように、本邦現存最古の漢詩集『懐風藻』での畳語の用例がその後の勅撰三集

に比べて一作品当り四分の一以下と有意に少ない事から、本邦における漢語受容の初期段階において、やはり畳語の理解は困難であり、受容も難しかったのは確かであろうと考えられる。ただ、勅撰三集では杜甫作品や『唐詩選』と同水準の頻度で畳語が用いられていることから、その筆頭の『凌雲集』が編まれた平安弘仁期には既に本邦における畳語の理解が成熟していた可能性がある。

次に二点目、「上代・中古前期に、本邦独自の畳語が造られることは稀であった。」点については、第六章**表三**から確認した「『菅家文草』『菅家後集』のみに見られる独自の畳語は無かった」点や、第七章での「顒顒」「喋喋」「鈴鈴」「適適」の中国典拠の調査から、少なくとも『菅家文草』『菅家後集』中の畳語には、本邦独自の、和製の畳語は現段階では確認できないと言える。しかし、第六章二節③でも指摘したとおり、中国文献に用例があっても、その畳語の意味用法まで中国例に準じているか全ての例については確認できていないため、今後も精査を進めていきたい。

九、今後の課題

本稿では、上代・中古前期の本邦漢詩文集として、『懐風藻』をはじめ勅撰三集、そして『菅家文草』『菅家後集』と、道真の同時代の家集である『都氏文集』『田氏家集』および紀長谷雄の作品を調査対象としたが、この他にも『日本書紀』や空海の『性霊集』、また時代の降った『本朝文粋』など、多くの本邦漢文資料が残っている。考察の精度を高めるためにも、今後引き続き、今回調査が及ばなかった文献の畳語用例の調査を進めたい。

また今回、調査対象を畳語に絞ったが、同じ擬音語・擬態語の性質を持つ漢語として双声語・畳韻語があり、今後それらについても調査できればと思う。

〈参考文献〉

小島憲之（一九六八）『国風暗黒時代の文学　上』塙書房、一九六八年

川口久雄（一九八一）『平安朝の漢文学』吉川弘文館、一九八一年

静永健（二〇〇二）「菅原道真の漢詩表現と中国語」『中国文学論集』三一、二〇〇二年

佐藤信一（二〇〇三）「《翻刻》斯道文庫蔵『菅家文草』巻一」『白百合女子大学研究紀要』三九、二〇〇三年

谷口孝介（二〇〇六）『菅原道真の詩と学問』塙書房、二〇〇六年

柳澤良一（二〇〇八）『石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書一　菅家文草』勉誠出版、二〇〇八年

安部清哉・中山大輔（二〇一二）「唐詩詩語「欹枕」の漢文訓読語としての「枕をそばだてて（聞く）」（側臥）」『学習院大学文学部研究年報』五九、二〇一二年

中山大輔（二〇一四甲）「中国詩詩語「敧枕」用法変遷論：唐・五代詩篇」『人文』一二、二〇一四年

中山大輔（二〇一四乙）「中国詩詩語「敧枕」（枕をそばだつ）用法変遷論：宋詩篇」『学習院大学国語国文学会誌』五七、二〇一四年

中山大輔（二〇一五）「中国詩詩語「敧枕」（欹枕・枕をそばだつ）の用法変遷論：唐詞・宋詞篇及びまとめ」『人文』一三、二〇一五年
中山大輔（二〇二二）「『菅家文草』『菅家後集』から見た仏教語・唐代口語の受容――畳語を例として――」『東洋文化研究』二四、二〇二二年

〈参考資料〉

『日本国語大辞典（第二版）』小学館、二〇〇〇年
内田泉之助・網祐次『新釈漢文大系15文選（詩篇）下』明治書院、一九六四年
松浦友久『漢詩の事典』大修館書店、一九九九年
『大漢和辞典（修訂第二版）』大修館書店、一九八九年
川口久雄『日本古典文学大系72菅家文草　菅家後集』岩波書店、一九六六年
小島憲之『日本古典文学大系69懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』岩波書店、一九六四年
『校註日本文学大系24懐風藻　凌雲集　文華秀麗集　経国集　本朝続文粹』国民図書、一九二七年
中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釈』汲古書院、一九八八年
中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釈』汲古書院、一九九三年
三木雅博『紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引』和泉書院、一九九二年
高木正一『中国詩人選集12白居易　上』岩波書店、一九五八年
高木正一『中国詩人選集13白居易　下』岩波書店、一九五八年
鈴木虎雄・黒川洋一『杜詩』（全八冊）岩波書店、一九六三―一九六六年
目加田誠『新釈漢文大系19唐詩選』明治書院、一九六四年
川口久雄・若林力『菅家文草菅家後集詩句總索引』明治書院、一九七八年
石川忠久『新釈漢文大系112詩経　下』明治書院、二〇〇〇年
渡邉義浩『全訳後漢書14列伝四』汲古書院、二〇〇五年
市川安司・遠藤哲夫『新釈漢文大系8荘子　下』明治書院、一九六七年
早稲田大学図書館蔵『菅家文草巻第一－一二』寛文七年跋、https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he16/he16_00506/index.html
国立国会図書館蔵『菅家文草一二巻』元禄十三年跋、https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609151
『漢語大詞典』上海辞書出版社、一九八六年
『佩文韻府』索引本、台湾商務印書館、一九六六年
『全唐詩検索系統』http://cls.lib.ntu.edu.tw/tang/Database/index.html
『唐宋詞全文資料庫』http://cls.lib.ntu.edu.tw/CSP/W_DB/index.htm
『宋詩』http://cls.lib.ntu.edu.tw/QSS/home.htm
『漢籍電子文献資料庫』http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm
『中国哲学書電子化計画』https://ctext.org/zh
文草の会『菅家文草注釈　文章篇第一冊』勉誠出版、二〇一四年

【付記】本論の構成・論述については、草稿の段階から安部清哉先生（学習院大学教授）にご教導とご鞭韃を賜りました。末尾ながらこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

ENGLISH SUMMARY

Acceptance of Chinese reduplication in the Jodai and the early Chuko periods focusing on "Kanke Bunso" and "Kanke Koshu": Revising '適と遇' of the old Taikei revised and annotated by Hisao Kawaguchi to '適遇'

Nakayama Daisuke

This paper investigates examples of the use of convolutional words in

Japanese kanshi and kanbun（Chinese poetry）works in the Jodai and the early Chuko periods, and clarifies the acceptance of convolutional words from China to Japan. Among them, Sugawara no Michizane, who left behind many works of Chinese poetry and prose, was selected from examples of reduplication to examine characteristics of his representative collections of works, "Kanke Bunso" and "Kanke Koshu"（Number of different words: 117, total words: 263）.

As a result of the investigation, it became clear that 1）in Japanese kanshi and kanbun works from the Jodai period to the early Chuko period, the use of reduplication increased as time passed; 2）60（more than half of the 117 in total）reduplications in "Kanke Bunso" and "Kanke Koshu" were the first examples in Japan（according to "Nihon Kokugo Daijiten"（second edition））; 3）in Chinese poetry works of "Kanke Bunso" and "Kanke Koshu", at least four reduplications which were not based on the works in "All Tang Shi" were identified; 4）in the reduplication of "Kanke Bunso" and "Kanke Koshu", there was no usage in Chinese literature including prose until the Tang period, and Japanese original vocabulary could not be identified. Based on the above results, we conclude that it took a certain amount of time for the word to be used in Japan, and that Sugawara no Michizane was a pioneer in using many words.

Key Words: Reduplication, Sugawara no Michizane, Kanke Bunso, Kanke Koshu, Acceptance of Chinese.